

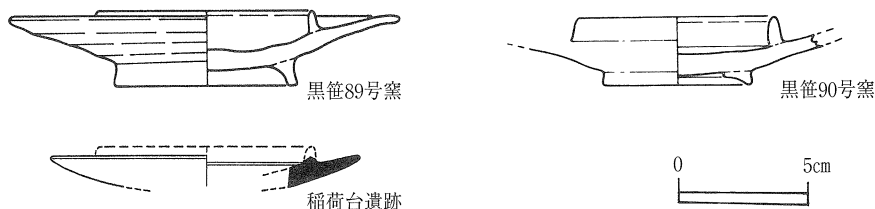
## 第5節 中半入遺跡出土の白磁碗・緑釉陶器

### 1 はじめに

今回の調査からは、堅穴住居跡（SI19）から初期貿易陶磁と考えられる白磁碗が、溝跡（SD16）からは緑釉陶器托がそれぞれ出土している。これらの陶磁器は一般的に出土するものではない。ここでは、これらの陶磁器の詳細と若干の検討を加え、その意義を検討していきたい。

### 2 緑釉陶器について

今回の調査では、SD16より緑釉陶器・托が1点出土している（第101図）。後述するように岩手県内では緑釉



第151図 緑釉陶器托の諸例

陶器の出土遺跡は少なく、ほとんどの遺跡では数点しか出土しない。しかも托という器種は岩手県内では初の出土であり、遺跡・遺構の性格を考えるうえで貴重な資料となるものと考えられる。そこで以下では、中半入遺跡出土例の特徴について述べ、さらに岩手県内における緑釉陶器の出土状況について触れることで、その位置付けについて若干の検討を加えてみたい。

まず器形的特徴について見ていきたい。托とは、体部内面の受部の上に碗を載せて用いる台のことである。しかし、全国的にも出土数は多くなく平安京や平城京などの都城あるいは寺院跡、窯跡や生産地周辺の遺跡で散見される程度である。中半入遺跡出土例は、体部は口縁部が直線的に開く浅い皿状を呈し、高台は有段輪高台である。受部は体部よりも低く、わずかに外方に開きながら立ち上がる。胎土は灰白色で、比較的硬質の焼き上がりである。釉薬は、二次変成しており本来の釉調を呈していないが、全体的に濃緑色で部分的に斑がみられる。本例のような形態の托は、猿投黒笹89・90号窯（素地）や千葉県稲荷台遺跡から出土している（第151図）。なお、奈良三彩の托は台部の端部が直立し、受け部が高く直立するタイプがほとんどで、本遺跡出土例のような体部が皿形を呈するタイプのものはむしろ越州窯系青磁の製品を模倣しているものと考えられる（斉藤2000）。生産地については高台形状から近江窯とも考えられるが、むしろ緑釉陶器托の生産は東海地方で多く、とくに黒笹90号窯出土例をはじめとする猿投窯製品との形態的類似性を考慮すると、本例も同様に猿投窯を含めた東海地方産であるものと考えておきたい。

生産年代については、緑釉陶器托は9世紀後半に生産が開始されるが、10世紀前半になると小型の段皿に統合されること（高橋1995）、加えて猿投窯では黒笹90号窯式期（9世紀後半～10世紀初頭頃）でのみ生産が確認されていることから、本遺跡出土例もこの時期に製作されたものと考えておきたい。なお、この年代観については本製品が出土したSD16で共伴する土師器の年代観（9世紀後半～10世紀中葉）と照らし合わせても矛盾するものではない。

次に岩手県内における緑釉陶器の出土状況についてみていきたい。岩手県内では、緑釉陶器の出土遺跡は県中部に集中しており、管見に触れた限りでは中半入遺跡を含めて17遺跡を確認することができた。出土遺跡をみると、官衙跡として水沢市胆沢城跡・盛岡市志波城跡、寺院跡として北上市国見山廃寺跡、また集落跡としては北上市上鬼柳Ⅲ遺跡のように墨書・刻書土器などが定量的に出土する集落遺跡からの出土が確認されている。陸奥国において緑釉陶器の出土例は、国府多賀城跡、多賀城外、多賀城廃寺などにその大

多数が集中し、城柵や一般集落での出土は多くないということであり（柳沢1994）、岩手県内の事例もおおむねこの傾向に当てはまるものと思われる。出土した数量的にも、胆沢城跡が破片数で約200点と群を抜いているものの、その他の遺跡では1～数点程度のみしか出土していないという状況も陸奥国全体の傾向と合致する。また、出土器種については胆沢城では碗・皿・蓋・手付瓶・香炉などがあるが、その他の遺跡ではほとんどが碗・皿類である。時期的にはいずれも9世紀中葉～10世紀前葉（黒笹14号窯式～黒笹90号窯式期）に比定できるということである。

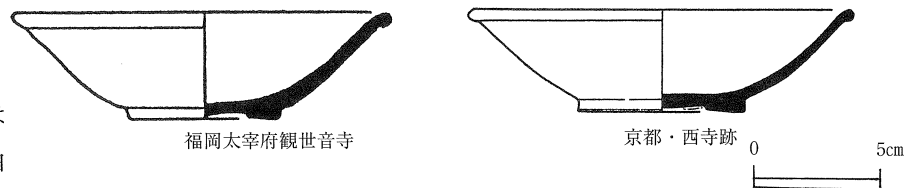
本遺跡出土例をみると、器種の相異を除けば遺跡の性格や年代などはおおむね岩手県内および旧陸奥国内の状況と合致する。今回出土した1点のみをもって直ちに遺跡の性格付けを行うにはなお慎重にならざるをえないが、中半入遺跡における緑釉陶器もまた、近傍に位置する胆沢城との関係を考慮して検討を重ねていく必要があろう。

（村田 淳）

### 3 白磁碗について

#### 3-1 白磁碗の観察

SI19 堅穴住居跡からは同一個体と考えられる白磁碗が2点出土している。



第152図 白磁碗Ⅰ類の諸例

削平された堅穴住居跡の埋土中からの出土であるため、厳密にこの堅穴住居跡から出土したと認定できないものの、他時期の遺構が周囲には存在しないことからこの住居跡から出土した可能性が高いものである。

この白磁碗は、2破片に分かれているが接合しない。いずれも口縁部から胴部にかけての破片であり、底部は残存していない。口縁端部は玉縁状にふくらみ、断面には小穴が認められない。

釉の色調はやや青みがかった釉調であり、断面をみるとほぼ均等にかかっている。胎土は堅く緻密であり、灰白色を呈する。極少量、黒色の粒子が含まれている。破片から想定すると、あまり器高は高くないと思われる。復元口径は15cmである。

これらの特徴から、太宰府分類のⅠ-1類に相当すると考えられる。したがって、底部はいわゆる蛇の目高台を有すると推定できる。

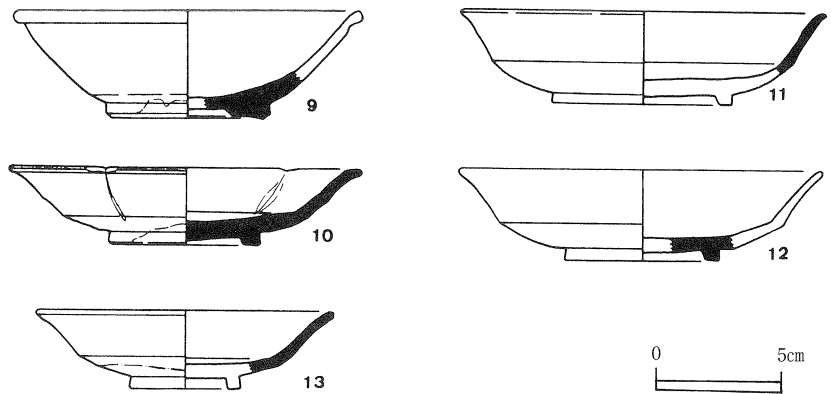
#### 3-2 出土例と年代

檀原考古学研究所編『貿易陶磁』や後藤秀一の論考（後藤1992）によると、東北地方からは13遺跡の初期貿易陶磁の出土例が紹介されている。このうち、白磁が出土している遺跡には宮城県・山王遺跡、同・市川橋遺跡、同・新田遺跡、同・西手取遺跡、福島県・古屋敷遺跡などがあり、そのほとんどが多賀城関連遺跡を中心に出土していることがわかる。

岩手県内においては、水沢市・胆沢城、矢巾町・徳丹城などからの出土が知られている（檀原考古学研究所附属博物館1993）。また、北上市・国見山廃寺跡からの出土も確認されている<sup>(1)</sup>。このように、岩手県内からは城柵をはじめとする官衙的な遺跡、寺院からの出土が多い。そのうち胆沢城からはある程度数量的にまとまって出土しており、その使用の中心があったことが予想される。胆沢城からは白磁（碗・輪花皿）、越州系青磁（碗・皿・鉢）などが出土している。その他の遺跡からは1点から数点のみの出土となる。

このような初期貿易陶磁の出土は官衙的な遺跡だけに限らず近年では一般的な集落からの出土も確認されている。とくに東京都日野市・落川遺跡からの出土以来、各地で堅穴住居跡からの出土が目されるようになり、

その需要層の検討に重要な役割を果たしている。しかし、これらの初期貿易陶磁を出土する遺跡は、「官衙的」に対して「一般的」という意味であり、けっして「普通」の集落とは異なっていることは明らかである<sup>(2)</sup>。すくなくとも、律令官人的な階層以外にもその需要層



第153図 胆沢城跡出土の白磁

があると考えられる。時期については、初期貿易陶磁は古くは伝世品を除くと8世紀末頃からで、量的にもっとも拡大するのは9世紀後半から10世紀代にかけてとされる(森田1995)。今回出土のSI19堅穴住居跡は出土土器の検討から10世紀初頭～前葉とされる。したがって、出土白磁碗についてはこの広範囲に流通した段階の製品であると考えてもよからう。胆沢城などからの出土例ともあまり時期差は無いと考えられる。

### 3-3 性格と位置づけ

以上今回出土の白磁碗について簡単に触れてみたが、初期貿易陶磁の出土は、堅穴住居跡から出土している例があるものの、決して通有の遺跡からは出土しないことは明らかである。

岩手県内の出土例は上記の両論考以外は今回集成することはできなかったが、その出土遺跡をみるとそれほど増加するとは思えない。胆沢城からの定量的な出土は、今回出土の白磁碗を考える点においては重要な示唆をあたえると思われる。この時期に胆沢城と結びつきがある階層以外に、初期貿易陶磁を所有できる階層が周辺に存在していたかという点は重要な問題であるが、これまでの状況を考慮するとやはり胆沢城との関係の中で捉えていく必要があろう。ただし問題点として、堅穴住居跡からの出土という点があることから、所有層に関する検討については中半入遺跡全体の調査が終了した上であらためて行う必要があり、今後の重要な課題となるであろう。

## 4 まとめ

上記のように緑釉陶器、白磁についての若干の検討を行った。いずれにおいても胆沢城との結びつきを想定させるような結果となっている。出土点数が少ない遺物であることから、確実なことは判断できないが、この両者が出土した意義は非常に大きいと思われる。今後さらに中半入遺跡の性格を考える上では貴重な資料となろう。

(西澤)

- (1) 北上市埋蔵文化財センター・杉本良氏のご教示による。
- (2) 日野市・落川遺跡の遺構配置は、掘立柱建物群、竪穴住居跡群が非常に多く集まっているなど大規模な集落である。  
公的ではないが、有力な階層が居住する集落と想定される。